

学生の音楽能力に関する調査研究（2）

Research about the Musical Ability of Students (2)

(2010年3月31日受理)

太田正清

Masakiyo Ohta

Key words : 小学校音楽科教育, 音楽科授業, 音楽能力, 音楽的能力, 音楽的能力の発現, 音楽能力調査

要 旨

人の音楽的能力の発現は幼児期から小学校中学年期頃までである。学生の音楽能力に関する調査を実施してみると小学校時代の音楽科授業の内容がほぼ分かってしまう。10歳頃くらいまでに音楽の基礎教育（リズム・メロディ・ハーモニー等の鳴り響く音や音楽を即座に正確に把握し反応すること）をきちんと受けないと成人してからあらゆる音楽を楽しむことができにくい。こうしたことから考えても日本の小学校音楽科授業は成功しているとは言い難い。高学年になって、女子児童はまだしも男子児童の多くは小学校で行われている8教科のなかで「音楽科授業」をいちばん好いていない。高学年になっても男子児童・女子児童ともに音楽活動が楽しくなるような音楽科の授業を低学年から積み上げていかなければならない。

1. 小学校音楽科授業の成果

現在の日本の小学校音楽科の授業の成果¹⁾を挙げてみれば次のようになると思う。

- ① 歌唱教材が何曲か歌えるようになる。ただし、階名唱ではなく歌詞唱である。
- ② 1学年から鍵盤ハーモニカ、3学年からソプラノ・リコーダーを楽器として使用するが、なぜか完璧に使いこなせるようになる児童はごく稀で、小学校を卒業するとどこかに消えていく。
- ③ 何曲か鑑賞教材を使用し楽曲を鑑賞するが、あまり印象に残らない。むしろ、運動会・給食時・下校時のBGMの方が印象に残っている。

小学校6年生の児童に「8教科の好き具合」に関して質問²⁾したことがある。筆者が調査した小学校の6年生児童は音楽科の授業に関して次のように回答した。男

子児童は8教科中第8位。女子児童は8教科中第2位。男子児童の多くは「音楽科授業」は好きではない。女子児童は概ね好きである。

なぜこうした事態に至るのかの推測は比較的簡単にできる。「音楽科の授業は児童の耳に届く音や音響を使って実施されているが、男子児童の多くはそれらの意味を理解していない」換言すれば、楽典等は殆ど理解できていない。ハ長調でも読める男子児童は少ない。リコーダーにしても楽譜を用意しても殆ど役に立たない。誰か、リコーダーをきちんと演奏できる人（教師であっても児童であっても）がいなければ、リコーダー演奏はできない。よくできる人を真似ているだけである。

Reveszの調査³⁾によれば、音楽的能力が発現した年齢は表1のとおりである。

表1. 音楽的能力が発現した年齢

年齢	2歳以下	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳
男子	18	28	30	18	37	26	15
女子	17	18	10	13	16	12	11
年齢	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳
男子	19	16	30	3	16	9	8
女子	12	13	20	1	7	2	2
年齢	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳以上	合計
男子	2	3	2	0	1	3	191
女子	1	1	0	1	0	0	109

このことから考えると、小学校中学年頃までに実施した音楽科授業で培った音楽的能力がその人のその後の音楽活動を左右することとなる。

かつて、日本の小学校音楽科授業で、子どもの音楽的能力の発現とか音楽能力を伸ばすことを目的として行われた音楽科授業がある。山本弘⁴⁾の提唱した「ふしづくりの音楽教育」である。この音楽教育は大成功を収めた。しかし、この教育が継続できにくい理由がひとつある。それは、実施校の全教員の意識にずれが生じるからである。理論的に正しい教育もそれを実施する教員の一人にでも意識のずれが生じれば、学校あげての実践は成功裏には導かれない。

2. 学生に実施した音楽調査

平成21年度後期、子ども学科の「音楽科教育法」において履修の学生に岐阜県小学校音楽部会基礎能力表作成委員会編の「音楽基礎能力調査」⁵⁾(実音を使用して行う)を実施した。

現在の実音を使用しての「音楽基礎能力調査」は平成10年度の学習指導要領に準拠して作成された次の7つの項目を調査しようとしたものである。1. 拍子, 2. リズムフレーズ, 3. フレーズ, 4. 旋律の感じ, 5. 和声・和音, 6. 旋律との響き, 7. 視唱・視奏記号。

この「音楽基礎能力調査」が使い始められた昭和40年代には、当時の学習指導要領に準拠した次の8項目により構成されていた。1. フレーズ, 2. 調性, 3. 和音, 4. 身体反応, 5. 旋律リズム, 6. 合奏リズム, 7. メロディ, 8. 演奏曲。

表2. 高学年音楽能力テストの構成

リズム	拍子	1番 5問
		2番 5問
	リズムフレーズ	3番 5問
		4番 5問
旋律	フレーズ	5番 5問
		6番 5問
	旋律の感じ	7番 5問
		8番 5問
和声	和声・和音	9番 5問
		10番 5問
	旋律との響き	11番 5問
		12番 5問
視唱奏記号	視唱・視奏記号	13番 5問
		14番 5問

(1) 実音による高学年 音楽能力テストの内容

この調査はCDに収録された実音を使用して行うものである。以下に録音されたナレーションや音楽を記してみる。

《高学年、音楽の調査を始めます》

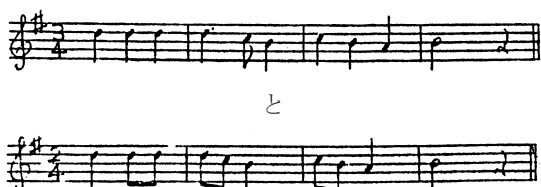
1番、曲を聴いて、何拍子の曲か聴き分けましょう。(静かにねむれ) 4拍子でしたね。四角の中に4と書き入れましょう。このように、2拍子なら2, 3拍子なら3, 4拍子なら4, 6拍子なら6と四角の中に書き入れましょう。では、始めます。(①勇気一つを友にして ②緑のロンド ③口ぶえふいて ④ペールギュント「朝」 ⑤こきりこぶし)

2番、次の曲は、どんな形で指揮をしたらよいでしょうか。よく聴いて2拍子ならア, 3拍子ならイ, 4拍子ならウ, 6拍子ならエというように、四角の中にア・イ・ウ・エを書き入れましょう。では、始めます。(①故郷の人々 ②グリーングリーン ③ゆかいなゆめ ④いるかの旅 ⑤ゆかいに歩けば)

3番、元の節を弾いた後で、その節の拍子を変えて弾きます。よく聴いて何拍子に変わったかを聴き取りましょう。2拍子なら2, 3拍子なら3, 4拍子なら4, 6拍子なら6の数字で書き入れましょう。はじめに練習し






てみましょう。

元の譜「山の朝」



と

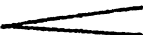
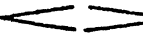
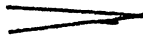

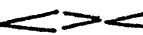
2拍子に変わりましたね。2と書き入れましょう。では、始めます。

- (曲名 口ぶえふいて ①  ②  ③  ④  ⑤ )

4番, 曲を2回ずつ弾きます。2回目の演奏が1回目より速いと感じたら○, 遅いと感じたら×, 変わらないと感じたら△を書きましよう。練習してみましょう。〈林の朝 ♩=108 ♩=92〉2回目の演奏は, 1回目の演奏より遅くなっていましたね。×を書き入れましよう。では, 始めます。(①口ぶえふいて ②星の世界 ③エーデルワイス ④創作曲 ⑤ねんねしなされ)

5番, これから弾く曲を聴いて, フレーズごとに似た節, 違う節を聞き取りましよう。4フレーズの曲「春の小川」で練習してみます。第1フレーズ(演奏)これは, 元の節ですからaと書いてあります。第2フレーズ(演奏)これは, 元の節と似ていますから, 2つ目の□の中にa'と書き入れましよう。第3フレーズ(演奏)これは, 元の節と違う節ですから, 3つ目の□の中にbと書き入れましよう。第4フレーズ(演奏)これは, 元の節と似ていますから, 4つ目の□の中にa'と書き入れましよう。このように, 表現の仕方を聴き取って, それに合う記号を選びましよう。は, 始めます。(①一日の終わり ②ぞうさん ③ぶんぶんぶん ④星の世界 ⑤口ぶえふいて)

6番, 表現の仕方を聴き取りましよう。これから, 4小節の節を弾きます。(電子オルガンで「ふるさと」を演奏)今の演奏は, 節が進むにつれて, アの記号のように, だんだん強くなるように表現しましたね。練習の□の中に, アと書き入れましよう。このように, 表現の仕方を

聴き取って, それに合う記号を選びましよう。では, 始めます。(①ドレミのうた ②故郷の人々 ③とんび ④駅馬車 ⑤もろ人こぞりて)(ア,  イ,  ウ,  エ,  オ, )

7番, 「あおぞらたかくうたごえひびく」という歌詞にいろいろな節をつけます。それぞれ1箇所だけ, 言葉と節の感じが合わないところがあります。その小節を見つける問題です。練習してみましよう。

(歌う)

3小節目の「うたごえ」(歌う)のところが不自然でしたね。3小節目の()に×印をつけましよう。では, 始めます。

練習

- ① 
- ② 
- ③ 
- ④ 
- ⑤ 

8番, これから弾く節は途中から節の感じが変わります。(演奏「禁じられた遊び」)短調から長調に変わりましたね。このように節の感じが短調から長調に変わったらチ, 長調から短調に変わったらタ, 長調から日本の節に変わったらニの記号を書きましよう。では, 始めます。(①夢をのせて ②雪の降る街を ③かつこう ④フェアランドール ⑤さあ太陽を呼んで来い)

9番, ピアノで○○○○○○○Vのリズムで和音を弾きます。答えの欄で, 一箇所書いてないところがあります。書いてないところの和音はどの和音でしょうか。「ドミソ」(ピアノ音)なら1, 「ドファラ」(ピアノ音)なら4, 「シレソ」(ピアノ音)なら5, 「シレファソ」(ピアノ音)なら7の数字を書き入れましよう。(全て長調)

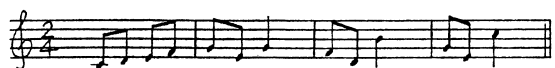
一度、練習してみましょう。(ピアノでI, IV, V, Iを弾く)書かれてないところの和音は「シレソ」でしたね。練習の欄に5と書きましょう。では、問題に移ります。問題は1回だけ弾きます。(1. I I I V
2. I I V V I 3. I I V I V 4. I I I V I
5. I V V V 7)

10番, 9番と同じやり方です。短調の和音を聴いて「ラドミ」(ピアノ音)なら1, 「ラレファ」(ピアノ音)なら4, 「#ソシミ」(ピアノ音)なら5, 「#ソシレミ」(ピアノ音)なら7の数字を書き入れましょう。では、始めます。(1. I I V I 2. I V I V 3. I I I V I 4. I I V V I 5. I I V I V)

11番, 4小節の節を弾きます。譜と伴奏をよく聴いて和音を聴き取り, 空いているところに1, 4, 5, 7の数字を書き入れましょう。一度, 練習してみましょう。第3小節目は「シレソ」の和音, 第4小節目は「ドミソ」の和音でしたね。練習のところに「5 1」と書き入れましょう。問題は長調と短調の両方出てきます。では, 始めます。2回ずつ弾きます。(①静かに眠れ ②ふるさと ③星の世界 ④おちば ⑤創作曲)

12番, 主旋律に副次的な旋律を加えて, 二重唱や三重唱をします。響きの不自然な小節がひとつだけあります。響きの不自然な小節に一つだけ○をつけましょう。一度, 練習してみましょう。響きの不自然な小節は, 第2小節目でしたね。練習のところの「ど る」のところに○をます。(①ふるさと ②星の世界 ③エーデルワイス ④かりがわたる ⑤勇気一つを友にして)

13番, 短い節をピアノで2回ずつ弾きます。楽譜と違った演奏をしている小節の番号に×を付けましょう。では, 練習をしてみます。



(上の楽譜を3秒おいて2回繰り返して弾く)

今の演奏は, 1回目の「ドレミラ」(音程をつけて歌う)を「ドレミファ」(音程をつけて歌う)と演奏していま

したね。1に×を打ちましょう。では, 始めます。(①創作曲へ長調 ②創作曲ハ長調 ③創作曲へ長調 ④創作曲へ長調 ⑤創作曲ニ短調)

14番, 短い節をピアノで弾きます。その節を五線の上に音符で書き入れましょう。途中まで書いてありますから, 続きを書き入れましょう。2回ずつ弾きます。では, 始めます。(①創作曲ハ長調・7音中3音記入 ②創作曲ハ長調・7音中3音記入 ③創作曲ハ長調・9音中4音記入 ④創作曲ハ長調・7音中5音記入 ⑤創作曲ハ長調・7音中5音記入)

3. 音楽調査の結果と考察

実音による高学年音楽能力テスト(以下, 音楽能力テスト)を平成21年度後期「音楽科教育法」を履修した学生に2回(平成21年9月・平成22年1月)実施した。以下, 平成21年9月実施を前調査, 平成22年1月実施を後調査と称する。また, 結果の集計と考察を行ったのは平成20年度入学生で前調査・後調査の2回の音楽能力テストと別のアンケート1件計3件に関して全箇所回答した学生のみとした。男子学生6名と女子学生6名計12名であった。

結果は各項目, 個人ともに100点満点で表した。60点以上であれば, 小学校高学年の音楽的能力(音楽的技能)をまずまず習得したと考えられる。

結果は表3, 表4で示した。男女差が相当あるので男女別に考察してみたい。

まず, 男子学生の結果から考察してみる。1回目の調査を平成21年9月28日に実施した。(以下, 前調査と称する)男子学生の平均は50点であった。60点には達せず厳しい結果となった。中でも和音11.12が33点, リズム1.2が38点であった。次がリズム3.4の40点, 旋律7.8の53点, 和音9.10の54点であった。60点を越えたのは視唱奏の63点と旋律5.6の69点であった。

2回目の調査は平成22年1月28日に実施した。調査結果で最も厳しかったのはリズムの18点であった。他の項目とかけ離れて低かった。

項目別の伸長率が高い順に並べると旋律7.8(158%)→和音11.12(136%)→視奏奏(122%)→リズム3.4

表3. 調査結果（男子学生）

		リズム 1.2	リズム 3.4	旋律 5.6	旋律 7.8	和音 9.10	和音 11.12	視唱奏	個人平均
前 調 査	m 1	53	36	79	30	87	14	9	44
	m 2	71	20	43	64	26	53	56	48
	m 3	22	36	92	64	87	53	91	64
	m 4	36	59	79	48	59	32	71	55
	m 5	11	82	79	64	41	14	71	52
	m 6	36	8	43	48	26	32	82	39
	平均	38	40	69	53	54	33	63	50
後 調 査	m 1	11	59	43	98	41	14	56	46
	m 2	11	59	79	91	41	32	71	55
	m 3	22	36	92	98	96	70	82	71
	m 4	22	59	79	91	41	84	82	65
	m 5	22	36	13	64	74	14	82	44
	m 6	22	36	79	64	74	53	87	59
	平均	18	48	64	84	61	45	77	57

(120%) →和音9.10 (113%) →旋律5.6 (93%) →リズム1.2 (47%) であった。また、男子学生個人平均点の上昇率は、m 6 (151%) →m 4 (118%) →m 2 (115%) →m 3 (111%) →m 1 (105%) →m 5 (85%) の順であった。

男子学生は2年後期の音楽関係の講義や演習で相当努力した跡が伺える。

ここで、後調査で一番高得点をあげたm 2学生の前調査から後調査への伸長の様子を図示する。

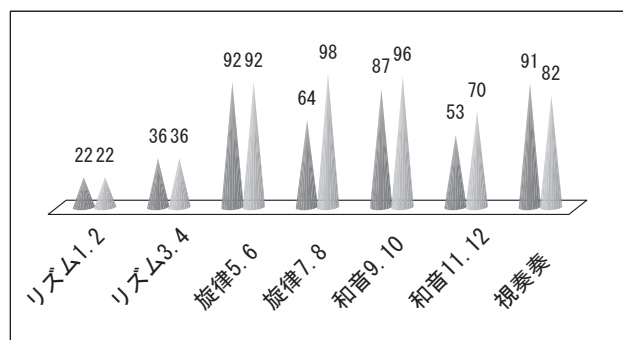


図1 m 2 学生の伸長 (■前調査 ■後調査)

女子学生の結果を考察してみる。2回の調査時期は男子学生と同じである。

表4 調査結果（女子学生）

		リズム 1.2	リズム 3.4	旋律 5.6	旋律 7.8	和音 9.10	和音 11.12	視唱奏	個人平均
前 調 査	f 1	36	82	79	91	96	89	82	79
	f 2	96	36	63	81	41	84	100	72
	f 3	71	100	92	100	74	70	100	87
	f 4	71	59	27	64	59	53	71	58
	f 5	22	82	92	100	96	84	87	80
	f 6	11	59	43	1	41	70	56	40
	平均	51	70	66	73	68	75	83	69
後 調 査	f 1	71	94	43	98	96	94	87	83
	f 2	53	99	100	81	99	89	100	89
	f 3	53	94	100	98	87	94	97	89
	f 4	22	94	79	91	59	32	87	66
	f 5	46	62	100	100	100	53	82	78
	f 6	22	36	79	14	87	84	71	56
	平均	45	80	84	80	88	74	87	77

女子学生の1回目の平均点は69点とまずまずの音楽的能力を身に付けていた。調査7項目中リズム1.2が51点と厳しい状態であったが、この項目に関しては、2回目は45点となり更に厳しい状態となった。特にリズムに関しては10歳までに反応する力を身に付けておかないとそれ以降は身に付けること自体が非常に難しいこととなる。リズム1.2を除く他の6項目については相当音楽的能力を身に付けていたが、後調査では更に伸ばさせることができた。

中でも視唱奏の能力はかなり高い。前調査83点、後調査87点。女子学生は楽譜を見て歌ったり、楽器を演奏したりすることは男子学生に比べれば抵抗は少ない。聴音・記譜も男子学生よりはよくできる。

項目別の伸長率を高い順に並べるとリズム和音9.10 (129%) →旋律5.6 (127%) →リズム3.4 (114%) →旋律7.8 (110%) →視唱奏(105%) →和音11.12(99%) →リズム1.2 (88%) であった。また、女子学生個人平均点の上昇率は、f 6 (140%) →f 2 (124%) →f 4 (114%) →f 1 (105%) →f 3 (102%) →f 5 (98%) の順であった。

女子学生も2年後期の音楽関係の講義や演習で相当努力した跡が伺える。

ここで、後調査で一番高得点をあげた二人の女子学生（f 2, f 3）の前調査から後調査への伸長の様子を图示する。

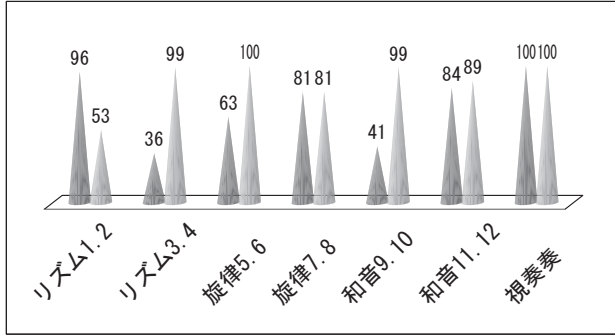


図2-1 f 2 学生の伸長 (■前調査 ■後調査)

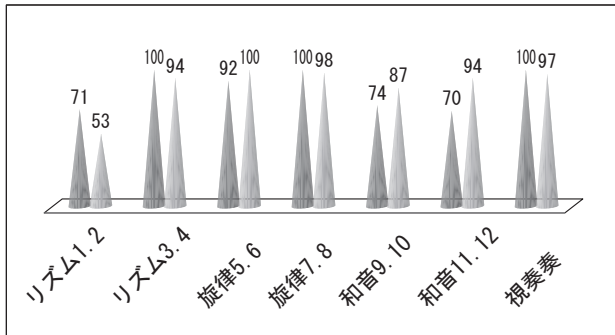


図2-2 f 3 学生の伸長 (■前調査 ■後調査)

4. 小学生との比較

今回の調査と同じものを過去O市内のK小学校⁶⁾ 6年生とS小学校6年生に実施したことがあるので比較してみたい。まず、K小学校6年生男女児童と本学学生とを比較したのが図3である。K小学校は小規模校である。調査できたのは、6年生男子児童6名と女子児童11名であった。

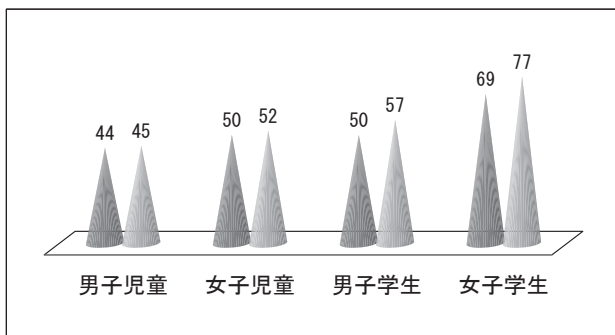


図3 K小学校6年生との比較 (■前調査 ■後調査)

図から男子児童は特に音楽活動に大変苦しい思いをしているのが読み取れる。何とか6学年の音楽活動についていこうとするには60点は必要かと思われる。

次に、S小学校6年生⁷⁾ 児童と本学学生とを比較したものが図4である。

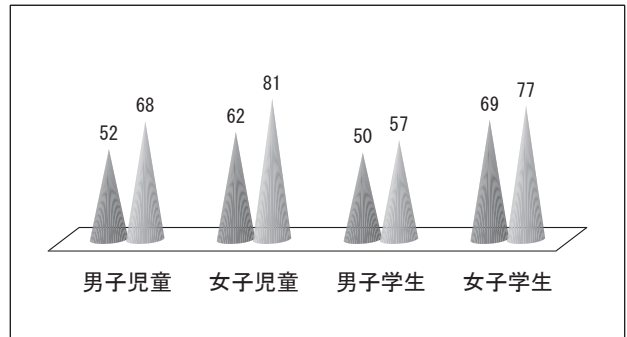


図4 S小学校6年生との比較 (■前調査 ■後調査)

S小学校は平成14年度に中国・四国音楽教育研究指定校小学校部会の授業公開校となった小学校である。

6年生は3クラスという中規模小学校である。平成14年度に音楽科の公開授業を行った学校であるが、音楽科の授業研究は平成12年度から計画的に実施されていた。学校中の職員が一丸となって音楽科授業研究に取り組んでいた。筆者は平成13年と平成14年度に6年生で本学学生に実施したと同調査を行った。比較してみるとわかることであるが、児童の方が学生よりもいわゆる音楽の3要素と言われるリズム、メロディ、ハーモニーといった基礎的な音楽的能力は小学生時代（出来れば10歳頃まで）にきちんと身に付けさせておけば、その人は一生音楽活動をするのにまず困ることはない。

小学校では国語科とか算数科の授業研究はさかんに行われているが、こと音楽科の授業研究は数十年に一度でも行われればよい方である。

何も音楽科の授業研究が行われなくても、その小学校に勤務する教員が同じ意識で音楽科授業に取り組むだけでもその小学校の児童の持つ音楽的能力を発達させるのである。岡山県下の小学校では、9年か10年に一度くらい音楽科の授業研究に取り組む学校が数校あるというのが現状である。

5. 音楽科教育法アンケートとの比較

(1) 音楽活動, 音楽科授業への自信

今回, 音楽能力テストを実施した男子学生6名女子学生6名計12名に音楽科教育法(小学校)アンケート(3種類)を実施した。音楽能力テスト・音楽科教育法アンケートの結果を比較してみる。

はじめに, 音楽科教育法アンケート I は次である。

表 5. アンケート I

あなた自身のことについてお尋ねします。各項目について(基準)	
4: とてもそう思う	3: まあそう思う
2: あまりそう思わない	1: とてもそう思わない
にならって, 4~1のいずれかの番号を○で囲んでください。	
1. 音楽活動には自信がある。	4 3 2 1
2. ピアノ伴奏には自信がある。	4 3 2 1
3. 歌唱には自信がある。	4 3 2 1
4. 小学校(低学年)で音楽の授業をする自信がある。	4 3 2 1
5. 小学校(中学年)で音楽の授業をする自信がある。	4 3 2 1
6. 小学校(高学年)で音楽の授業をする自信がある。	4 3 2 1

回答は4. 3. 2. 1のいずれかに○印が付けられている。いずれの回答であっても25倍して100ポイントとして集計した。

男子学生の平均点は1番58ポイント, 2番42ポイント, 3番58ポイント, 4番42ポイント, 5番38ポイント, 6番38ポイントであった。男子学生の中で得点の一番高かった人はm3であった。

学生m3の得点は1番100ポイント, 2番75ポイント, 3番100ポイント, 4番75ポイント, 5番75ポイント, 6番75ポイントであった。

女子学生の平均点は1番54ポイント, 2番54ポイント, 3番63ポイント, 4番58ポイント, 5番50ポイント, 6番50ポイントであった。女子学生の中で得点の一番高かった人はf2であった。

学生f2の得点は1番100ポイント, 2番100ポイント, 3番75ポイント, 4番100ポイント, 5番100ポイント, 6番100ポイントであった。

男女とも一番ポイントの高かった人を除けば小学校で音楽の授業をする自信のある人は殆どいない。

(2) 歌唱への自信

次に, 音楽科教育法アンケート II に関して述べる。

表 6. アンケート II

あなた, 小学校の歌唱共通教材曲 ⁸⁾ (各学年4曲, 全学年24曲)を「歌唱する」並びに「ピアノ伴奏する」自信についてお尋ねします。各曲について4:とても自信がある 3:まあ自信がある 2:あまり自信がない 1:とても自信がないにいずれか一つ○印を付けてください。	
1. うみ	2. かたつむり
3. 日のまる	4. ひらいたひらいた
5. かくれんぼ	6. 春がきた
7. 虫のこえ	8. タヤけこやけ
9. うさぎ	10. 茶つみ
11. 春の小川	12. ふじ山
13. さくらさくら	14. とんび
15. まきばの朝	16. もみじ
17. こいのぼり	18. 子もり歌
19. スキーの歌	20. 冬げしき
21. 越天楽今様	22. おぼろ月夜
23. ふるさと	24. 我は海の子

回答は4. 3. 2. 1のいずれかに○印が付けられていた。いずれの回答であっても25倍して100ポイントとして集計した。

男子学生の「歌唱」に関する自信の度合いの各曲の平均点は, 1(うみ)50ポイント, 2(かたつむり)46ポイント, 3(日のまる)38ポイント, 4(ひらいたひらいた)50ポイント, 5(かくれんぼ)38ポイント, 6(春がきた)58ポイント, 7(虫のこえ)50ポイント, 8(タヤけこやけ)55ポイント, 9(うさぎ)50ポイント, 10(茶つみ)46ポイント, 11(春の小川)50ポイント, 12(ふじ山)42ポイント, 13(さくらさくら)50ポイント, 14(とんび)46ポイント, 15(まきばの朝)42ポイント, 16(もみじ)42ポイント, 17(こいのぼり)55ポイント, 18(子もり歌)38ポイント, 19(スキーの歌)38ポイント, 20(冬げしき)38ポイント, 21(越天楽今様)38ポイント, 22(おぼろ月夜)42ポイント, 23(ふるさと)50ポイント, 24(我は海の子)50ポイントであった。男子学生全体に関して, 24曲の平均は46ポイントであった。

男子学生の中で得点の一番高かった人はm3であった。学生m3の得点は全て75ポイントと高いものであ

た。

男子学生はm3の人を除くと小学校音楽科授業（児童の前）で何とか歌唱できそうな曲は24曲中1曲「春がきた」（小学校2学年の共通教材曲）であろうか。

女子学生の「歌唱」に関する自信の度合いの各曲の平均点は、1（うみ）67ポイント、2（かたつむり）71ポイント、3（日のまる）50ポイント、4（ひらいたひらいた）63ポイント、5（かくれんぼ）58ポイント、

6（春がきた）71ポイント、7（虫のこえ）58ポイント、8（夕やけこやけ）75ポイント、9（うさぎ）67ポイント、10（茶つみ）58ポイント、11（春の小川）67ポイント、12（ふじ山）50ポイント、13（さくらさくら）75ポイント、14（とんび）58ポイント、15（まきばの朝）50ポイント、16（もみじ）55ポイント、17（こいのぼり）75ポイント、18（子もり歌）58ポイント、19（スキーの歌）42ポイント、20（冬げしき）42ポイント、21（越天楽今様）42ポイント、22（おぼろ月夜）55

ポイント、23（ふるさと）75ポイント、24（我は海の子）55ポイントであった。女子学生全体に関して、24曲の平均は60ポイントであった。

女子学生の中で得点の一番高かった人はf2であった。学生f2の得点は平均で89ポイントと高いものであった。

女子学生で小学校音楽科授業（児童の前）で何とか歌唱できそうな曲は24曲中15曲と思われる。挙げてみれば次のようになろうか。

小学校1学年の共通教材曲*以下は学年表記のみ、「うみ」「かたつむり」「ひらいたひらいた」、2学年「かくれんぼ」「春がきた」「虫のこえ」「夕やけこやけ」、3学年「うさぎ」「茶つみ」「春の小川」、4学年「さくらさくら」「とんび」、5学年「こいのぼり」「子もり歌」、6学年「ふるさと」であろうか。低・中学年から高学年へと学年が上がるに従って自信をもって歌える教材曲が減少する。

(3) ピアノ伴奏への自信

男子学生の「ピアノ伴奏」に関する共通教材曲24曲の自信の度合いを尋ねた。6名中5名が24曲全部について「とても自信がない」という最低の評価をした。なお、一人m3の学生のみ24曲中22曲について「まあ自信がある」（75ポイント）のかなり高い評価をした。曲名を挙

げてみると次のようになった。

1学年「うみ」「かたつむり」「日のまる」「ひらいたひらいた」、2学年「かくれんぼ」「春がきた」「虫のこえ」「夕やけこやけ」、3学年「うさぎ」「茶つみ」「春の小川」「ふじ山」、4学年「さくらさくら」「とんび」「まきばの朝」「もみじ」、5学年「こいのぼり」「子もり歌」「スキーの歌」、6学年「おぼろ月夜」「ふるさと」「我は海の子」である。

女子学生で小学校音楽科授業（児童の前）で何とか伴奏できそうな曲は24曲中4曲と思われる。挙げてみれば次のようになろうか。

小学校1学年の共通教材曲*以下は学年表記のみ、「かたつむり」4学年「さくらさくら」5学年「こいのぼり」6学年「ふるさと」であろうか。

女子学生もピアノ伴奏では、大変に苦勞をしていることが伺える。なお、一人f2の学生のみ24曲中16曲ととても自信をもってピアノ伴奏ができると回答している。ちなみに、曲名を挙げてみると次のようになった。

1学年「うみ」「かたつむり」「日のまる」「ひらいたひらいた」、2学年「かくれんぼ」「春がきた」「虫のこえ」「夕やけこやけ」、3学年「うさぎ」「茶つみ」「春の小川」「ふじ山」、4学年「さくらさくら」「とんび」「まきばの朝」、6学年「おぼろ月夜」「ふるさと」「我は海の子」である。女子学生も1名を除いてピアノ伴奏では相当の苦勞をしている。

(4) 小学校時代に受けた音楽科授業への満足度

最後に、音楽科教育法アンケートⅢに関して述べる。

学生に小学校時代に受けた音楽科授業への満足度に関してアンケートを実施した。男子学生と女子学生とで大きな差がでた。100ポイントを最高評価として実施してみた。結果、男子学生の満足度は53ポイント、女子学生は89ポイントであった。

何故このようになるのか。筆者は次のように考える。

現在の小学校の音楽科授業担当者は児童に音楽活動をさせる場合に「技」ばかり要求する。例えば、「今歌った旋律はもげているよ。もっと音程正しく歌いなさい!」とか「今歌ったハーモニーは濁っていたよ。もっときちんとハモリなさい!」とか「リズムは4拍子よ。途中4拍子じゃないところがあったよ!」等出来の悪いところ

を連発する。

山本弘は小学校の音楽科授業に関して、次のように述べている。「(音楽活動するのに必要な音楽的基礎能力としてのリズム, メロディ, ハーモニーに自在に反応する) 力の上に(自在, 即座に音楽表現できる) 技はのる。技の上には力はのらない」⁹⁾ 正に, 山本が述べる通り, 今の児童に付けてやらなければならないのは「音楽する力」即ち音楽の三要素であるリズム, メロディ, ハーモニーに即座に自在に反応できる「音楽する力」であろう。「力」も育てていないところに「(表現としての) 技(リズム, メロディ, ハーモニーに即座に反応すること) をかけろ!」といっても無理である。

この「音楽する力」を付ける時期は先述したように10歳頃まで, つまり小学校の中学年の頃までである。それ以降は「力」を付けるのは非常に難しい。

小学校低中学年頃までにリズム, メロディ, ハーモニーに即座に反応できる力を付けてもらった児童は幸いである。「音楽する力」を付けてもらった児童だけが音楽科の授業で充実感を持てるのである。高学年男子児童が音楽科の授業を嫌がるのは「音楽する力」を付けてもらっていないからである。

5. 実践現場からの要望

小学校現場の音楽科授業担当教員は大学教育(小学校音楽科教育法やピアノレッスン等の音楽の演習等)に何をどの程度求めているのであろうか。

筆者は2009年8月, 岡山県備前市立小学校音楽科担当教員9名(全員女性)にアンケートを実施した。

小学校教員になるために大学では次の科目を何単位履修すればよいかに関してである。演習は90分を15回で1単位とした。講義は90分を15回で2単位とした。大学で学生が履修してほしい単位数は9名の平均を表している。

表7. 現場教員による大学で履修してほしい単位数

科目	単位数	科目	単位数
ピアノ	6.7	楽曲鑑賞	2.4
独唱	3.8	楽典	2.7
合唱	5.1	音楽科教育法	3.3
合奏	5.1		

もしも実践現場の教員が望んでいることを, 大学で履修すれば, 音楽関係の講義や演習は中学校教員二種免許状(音楽)が取得可能なくらいの単位数となる。

しかしながら, 小学校教員免許を取得する課程では, こんなにも多くの音楽関係の単位を組み込むことは不可能である。

結論からいえば, やはり小学校の音楽科授業の充実しかならないと思う。小学校中学年までに音楽的基礎能力の最大限の伸長を図るしか方法はないと思われる。

注

- 1) 吉富功修編『小学校音楽科教育法』著ふくろう出版, p. 101. 2010.
- 2) 岡山市立H小学校アンケート『教科の好き具合』6年生男子児童27名, 女子児童19名2002。
- 3) Revesz, G., “Introduction to the psychology of music” p. 170. 1954.
- 4) 山本弘 大正6年東京生まれ, 岐阜県師範学校卒業, 益田群下呂小学校, 高山市大八中学校等を経て岐阜県教育委員会指導主事, 吉城郡角川小学校長, 高山教育事務所学校職員課長等を歴任, 昭和52年文部大臣表彰, 昭和52年度全国唱歌ラジオコンクール高等学校の部課題曲:《若き神々の歌》の旋律を作曲。
- 5) 岐阜県小学校音楽部会基礎能力表作成委員会『小学校音楽学習の手引き基礎能力表』日本音楽著作権協会(出)許諾第9061066-0011号, 1989。
- 6) 岡山市立K小学校6年生男子児童6名, 女子児童11名に音楽能力調査実施, 2007-2008。
- 7) 岡山市立S小学校6年生男子児童, 女子児童に音楽能力調査実施, 2001-2002。
- 8) 小学校学習指導要領解説『音楽編』文部科学省, pp. 88-91. 2008。

